

澁川一流柔術  
無雙神傳英信流抜刀兵法

# 貫汪館会報

第71号

発行 貫汪館  
発行日 平成二十四年六月三十日  
発行人 森本邦生  
広島県廿日市市宮内一四八〇

平成二十四年

## 貫汪館広島護国神社奉納演武会



平成24年4月1日(日)、広島護国神社儀式殿において、貫汪館の恒例行事である無雙神傳英信流抜刀兵法及び澁川一流柔術の奉納演武を行いました。

今回の演武には、貫汪館で無雙神傳英信流抜刀兵法及び澁川一流柔術を学ぶ門弟21名を含む、合計25名が参加しました。演武に先立ち行われた正式参拝で、広島護国神社の潮欄宜様より、「新渡戸稲造という人が我が国の武士道精神を世界に紹介して広めました。武士という職業が無くなって久しい現代に、この考えはそぐわないと

いう向きもあるようですが、これは何も武士の美風のみを謳ったものではなく、本来あるべき日本人の道徳感を説いているものだと思います。武士道では、「義」「勇」「仁」「礼」という四つの言葉が表わす心を重要視します。

「義」とは、横着な自分を律し、人としてあるべき姿を見失わず正しい行いをする心の事。「勇」とは、恐怖に負けず正義を貫こうとする強い心の事。「仁」とは、相手を思いやる優しい心。自分よりも弱い人を労わり、更には自分と戦った者に対してさえも思いやりを持って接する心の事です。「礼」とは、礼儀の礼、すなわち相手を一人の立派な人間として認めますという心を表します。

これら四つの心を大事にしていく事が武士道の根幹とされるのですが、この事は何も武道だけにとどまらず、社会で生きていく我々にとっても大切な要素になります。

昨年の震災を通じて世界に賞賛された日本人の規律の正しさ、他人を思いやる気持ち等は、一つの遺情情報として、武士の時代の心が今の我々にも脈々と受け継がれている証しだと思います。

皆さん、ぜひ武道を通して、本来日本人の持つ精神をしっかりと育てていただきたいと思えます。」とお言葉を賜りました。

正式参拝後、演武に先立ち、貫汪館顧問岡田先生より、「お茶の世界では、「見てこそ習え」という言葉があります。手取り足取り教えてもらっただけが稽古ではありません。今日は先生方の技を自分の眼で盗むくらいの気持ちで見学しましょう

う。」とお言葉に続き、貫汪館館長森本先生より「今日の演武は人に見せるためではなく、神様に見ていただくためのものです。子供達は、日頃指導されている内容をよく思い出し、そして指導されたとおり忠実に演武して下さい。大人の方は、今までの稽古の成果を出すだけです。上手に見せようとせず、今まで養ってきたものを素直に出してください。」とお言葉の後に演武を開始しました。

演武は、岡田先生の居合、森本先生の柔術に続いて、各門弟が日頃稽古している居合、柔術の形をそれぞれ交互に奉納しました。今回、柔術を学ぶ子供達の多くが、受が懐剣で捕に斬りかかる「打込」の演武を行いました。固まらず柔らかい動きで懐剣を捌けていたように思います。しかし、稽古の時よりも気合が出ていないことが残念でした。今後、子供たちに指導する際は、形の手順の良し悪しではなく、もつと自由に動いて気合を出せるような配慮をせねばならないと思います。

全体的に、みなさん失敗のないようにと、丁寧すぎる演武をされていたように感じました。私自身も稽古不足による緊張が抜けず、先生にご注意を受けました。「上手く見せよう」とする雑念を払う事が出来ないままの甚だ本意な内容であったと猛省しております。その後、森本先生の無雙神傳英信流抜刀兵法の演武を最後に、今年の奉納演武を終りました。

閉会に際し、貫汪館顧問上條先生より「今日は皆さんの頑張る姿がありたく拝見しました。今後とも森本先生について

しっかりと精進して下さい。」とお言葉をいただき、最後に、森本先生より「今日の奉納演武で、自分の至らぬ所をたくさん気付かせていただいたと思います。自分の課題が何かを見極め、しっかりと稽古を積んでそれらを克服して行って下さい。」との講評をいただきました。

私も、今後は多忙を理由とせず自分自身の課題の克服に励んで参りたいと思えます。

(文責 濱村多賀司)

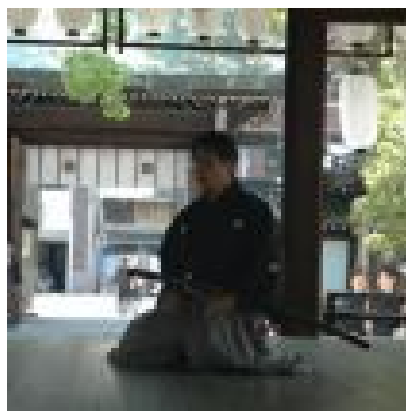
## 「下鴨神社、白峯神宮奉納演武会」

平成24年5月4日(金)京都下鴨神社にて奉納演武会(下鴨神社主催・日本古武道振興会共催)が行われました。

下鴨神社は、世界遺産に「古都京都の文化財」の一つとして登録されており、東本殿、西本殿は国宝にも指定されています。奉納演武会は舞殿、橋殿に別れて行われ、多くの流派が参加されていきました。貫汪館からは、森本先生が無雙神傳英信流抜刀兵法を演武されました。当日は小雨にもかかわらず多くの方々が見学に訪れていました。



翌5月5日(土)には、京都白峯神宮で古武道奉納奉告祭が行われ、森本先生が無雙神傳英信流抜刀兵法及び澁川一流柔術を、竹本師範代ご夫妻が澁川一流柔術を演武されました。



白峯神宮での演武会は、前日の下鴨神社より小規模でしたが、晴天の中で20の流派が演武を行ないました。私は、京都での演武を初めて拝見しました。2日間にわたり、多数の流派の演武で感じたことは、それぞれの流派の稽古量の多さです。また、日々の鍛錬の成果を演武された素晴らしい演武会であったと思えます。その中でも、特に、直心影流薙刀術、神夢想林崎流居合術の演武からは多くのことを学ばせていただきました。この経験を今後の稽古に生かしていきたいと思えます。



(文責 三崎俊広)

## 貫注館居合道講習会（五月）

平成24年5月27日（日）、貫注館主催の居合道講習会が廿日市市立原小学校体育館にて、関東など遠方からも御参加いただき行われました。

今回の講習会では英信流表を中心にも、その中でも柔術との関連が強い「浮雲」「山下風」「瀧落」を理解するため、澁川一流柔術の四留も併せて稽古いたしました。

この度、澁川一流柔術を稽古されている井上さんに、居合道講習会に初参加された感想を書いていただきましたので掲載いたします。



### 居合講習会に参加して

井上麻美

私は、今回の講習会で、午前中に刀を抜けるようになるということを目指して稽古しました。

最初、刀を抜くことの難しさを全く理解していませんでしたが、実際に行うとその難しさを痛感しました。

それは、私が「力を抜く」「腹で動く」ことができていなかったからです。

「力を抜く」「腹で動く」とは、いつも柔術の稽古中に指摘されているのですが、今回もできておらず、加えて、抜きたいと思う心が余計に姿勢を崩し、力みを生んでいます。

ただ、自分では抜きたいと思っていること自体に気づいておらず、ご指摘頂いて始めて気づき、改めて心を感じる稽古をもっとしなければと思いました。

また、帯の締め方や袴の結び方も間違っていました。帯や袴は、稽古中に落ちないことばかりを意識して着けており、以前、兄弟子に纏うように着けると助言を頂いたにも拘わらず、理解していませんでした。

その結果、刀の下にくるはずの袴の紐を上で締め、帯もきつく締め過ぎ、刀がささらない・鞘が動かないという事態になりました。

居合や柔術が生まれた時代や背景を考えるとその役割がわかるはずですが、何も考えずただ着けていただけの自分に恥じるばかりです。

後半になると、兄弟子のご指導により少しずつ力が抜け、あと一歩で刀が抜けるところまでいくことができました。完全に抜けなかったのはまだ下半身、特に右の股関節の力が抜けていなかったためですが、それでも「力を抜いた結果、刀が抜けている」ことを実感できました。

今回、講習会に参加させて頂いたことにより、改めて自分の課題を自覚することができ、現在、柔術の稽古でやっていることは全ての基本だということもわかりました。

加えて、居合という新しい世界にふれ大変勉強になり、居合と柔術が合わさった技を見ることにより柔術の稽古への意欲も上がりました。

今後、心と体の状態を感じることや「力を抜く」「腹で動く」こと等、全てのことひとつひとつを更に大切に稽古していこうと思います。



## 柔術澁川一流 許し・段位規定

柔術澁川一流の許しと段位規定について、ご存じでない方もおられるかと思えますので紹介します。

柔術澁川一流には修業の程度を示すため、初伝、中極意、免許皆伝・上極意の各許しがあります。その伝授には長年の月日を必要とするため、稽古の目標を失わないように段位の制度を設けられています。ただし、柔術澁川一流の正式な段階は初伝、中極意、免許皆伝・上極意の各許しであり、段位制度がこれに優先することはないと定められています。

許し及び段の種類については、段位は初段から六段までの六段階とし、六段が上位とされています。初伝、中極意、免許皆伝・上極意の各許しと段位との関係は次の通りです。

- 初段
  - 二段
  - 三段——初伝
  - 四段
  - 五段——中極意
  - 六段
  - 免許皆伝・上極意
- （ただし、免許皆伝・上極意に相当する段位は設けない）

次に昇段に要する年数及び年齢制限についてですが、紙面の都合上、初段及び二段についてのみご紹介いたします。

### 初段

稽古を初めて二年以上でかつ中学生以上の者とする。ただし16歳以上で稽古を怠らず、人格、識見ともに優秀なものにあつては1年以上とすることもできる。

また1級以上を保有するものにあつては中学生以上の年齢であれば1級授与後、半年以上とし、2級及び3級を保有するものにあつては中学生以上の年齢であればその級授与後、1年以上とし、4級及び5級を保有する者にあつては中学生以上の年齢であればその級授与後、1年半

以上とする。6級、7級を保有する者にあつては、その能力に応じ、1年半以上とすることもできる。

### 二段

初段取得後2年以上。ただし25歳以上で稽古を怠らず、人格、識見ともに優秀なものにあつては1年以上とすることもできる。

（ただし、二段以降には特例を設ける）

初段、二段の審査課題について、初段 履形の全ての形（ただし、当の形は除く）

二段 履形、吉掛、込入、六尺棒（表）の全ての形（ただし、当の形は除く）

とされており、  
段位が稽古の目的ではありませんが、なかなか思うように稽古が進まず、目標を失いかけている方もおられることと思います。稽古をして行く上で目標があるのとならぬのでは、稽古への取り組み方が変わってくるのではないかと考えます。今後の稽古の参考にされてみて下さい。

（文責 竹林哲也）



「藩政時代 広島城明細繪圖」より